2020年3月17日（火曜）
信濃毎日新聞「ひととき」
『人と健康　調和を求めて』

ひとときき

人と健康 調和を求めて

軽井沢病院に赴任する医師

稲葉（いなば） 俊郎（としろう）さん（41）

「西洋医学だけではなく、伝統療法や芸術、あらゆるツール（手段）で人を救いたい」。東京大病院で最先端の心臓カテーテル治療を専門としつつ、民間療法も積極的に取り入れる。「型破り」とも評される医師・稲葉俊郎さん（41）が4月、軽井沢町立国保軽井沢病院総合診療科に赴任する。

熊本市出身。3、4歳の頃は体が弱く、長く病院のベッドで天井を見上げ、死も意識した。その後、青年期に没頭した音楽や小説、絵画などアート分野への就職を考えたが、「子どもの時に救われた恩を返す仕事を」と東大医学部へ進んだ。

信州と縁ができたのは大学時代。医学部の山岳部に入ると、毎夏、北アルプス・涸沢（松本市安曇）にある東大涸沢診療所で登山者の診療に当たった。さらに研修医として松本市の相沢病院へ。救命救急の現場に身を置いた。「技術の差が出るのは心臓」と痛感し、東大病院に戻ると心臓カテーテルの道を究めた。

着実にキャリアを重ねる半面、医療現場で違和感を拭えなかった。「『工場』のように肉体的不具合を修理するだけでいいのか」。病気の背景に、家族間のトラブルなど心理的不調が潜んでいることもある。高齢者らの患者宅を訪れる在宅医療も始め、患者の声に耳を傾けた。

5年前の往診先。担当医の交代を繰り返し要求し「クレーマー」として知られた90歳すぎの女性を診た。粘り強く話を聞くと、3歳の時、親に「橋の下で拾ってきた子」と言われた記憶が深い傷になっていたと分かった。自分に価値を見いだせず、他人の価値を下げることで社会に復讐している、と感じた。

価値のない人間なんていない、傷つけられたとはいえ、親のおかげで貧しい時代も生きてきたのでは―。寄り添い、声を掛けると、女性は10分間泣き続けた。苦情はぴたりとやんだ。

「本当の不調の理由や心の底で求めるものを共に探すのが医師の仕事」が信条。心理療法の手法を使うこともあれば、映画や音楽、絵本を薦め、自らと向き合うよう促すこともある。独特の診察は、青年時代にのめり込んだアートや東洋哲学が源流だ。瞑想（めいそう）や座禅など、心身の調和を重んじる考え方は「もともと医学の一つと読み取ってきた」。芸術への造詣も深く、今年9月に山形県で開く芸術祭「山形ビエンナーレ」では医師として異例の芸術監督を任された。

軽井沢には家族で移住する。新天地を選んだ理由の一つは、2011年の東日本大震災と東京電力福島第1原発事故。「人と自然との適切な関係性が失われつつある」との思いを強くした。人や健康、ライフスタイルの調和を取り戻す実践の場として、伝統的な保養地の軽井沢を選んだ。

「人がいて、自然があって、健康で、生きるのが楽しい。行けば元気になる場所にしたい」。まちづくりなど社会参加の場にも顔を出すつもりといい、軽井沢での仕事を「キャリアの集大成」と捉えて意気込んでいる。

理想の医療について語る稲葉さん。4月に軽井沢病院へ赴任する